

平成19年12月1日

## 平成19年度 第2回学校協議会 記録

大阪府立槻の木高等学校  
学校運営室 山本 尚

日 時 平成19年 12月1日(土) 午後4時00分

場 所 槻の木高等学校 応接室

参 加 吹田さん (槻の木高等学校後援会会長)  
斉藤さん (大阪外国語大学講師)  
芝井さん (関西大学副学長)  
米津さん (高槻市立第1中学校校長)  
松本校長、長井教頭、小野事務長、秋元首席、吉田室長、山本首席

### 内 容 ① 松本校長あいさつ

本日は午前公開授業があり、予想を上回る来場があった。また午後からは学校説明会ということで、そのアンケートを回収した。今回もいい評価を頂いたが、この評価は、一つは生徒のおかげである。さらには、それを指導している本校教員のおかげでもある。そして、日頃より学校全体を支えて頂いている、学校協議会をはじめとする様々な学校関係の方々に深く感謝したい。さて、来年度は1クラス募集増になり、280名募集となる。一層、私たちの取り組みの中身が問われてくる。

今年度は、新たな取り組みとして、PTA地域懇談会を吹田地区市民センターで行った。同時に、同場所で、中学生保護者対象の学校説明会も行い、これも予想を上回る来場があった。12月17日も島本地区で行う予定にしている。

本日は様々な角度からのご提言を是非お願い致します。

### ② 司会より、第3回協議会の趣旨説明(秋元首席)

本日はまず本校より、今年度の行った携帯電話アンケートの分析と、学力向上の取り組みの説明をさせて頂き、皆様のご提言を頂きたい。

### ③ 学校からの発表(I) 地域別懇談会と携帯電話アンケートの報告(山本首席)

昨年の夏、文武両道で知られている岡山の城東高校に行った。そこで学んだことを2つ実践した。ひとつは職員室前廊下のホワイトボードで、今日では本校でも生徒の質問にこたえるための重要アイテムになっている。そして、もう一つは地域に出る活動である。今年度、PTAの活動として、学校の敷地から飛び出して活動することを一つの活動目標に掲げ、今年度は吹田地区に行き、「PTA懇談会」と、同時に「中学生保護者対象の学校説明会」を行った。この携帯電話アンケートはそのときの懇談会で発表したものを紹介したい。

<携帯電話アンケートの結果と分析>

芝井さん

大学でも携帯電話で出欠をとる先生がいる。学生にとって学生証よりも確実な身分証かもしれない。研究分野で専門にやっておられる先生がおられて、

その先生と連携をとられてもいいと思う。

ぼけ防止に簡単な計算をするといいいであるとか、文章を書くといいいという説があるようだが、文章を書く際に、携帯のメールではその効果がないそうである。ペンで書く作業こそ脳が活性化されるという。これほど、携帯電話が生活にくい込んでくると、直接のコミュニケーションが少なくなる。だからといって、自己規制で携帯電話の使用を意識的におさえるのは大変難しいことなのだと思う。

携帯電話の有効利用の指導、ルール化、モラル、大切な要素がたくさんあるように思える。また、報告でもあったように、学校を中心とした、何らかの教育プログラムが必要だと思う。

米津さん

本校中学生でも75%の所持率である。子どもたちはいろいろな用途で使用しているが、高校生と中学生が違うのは、やはり、判断力である。報告でも少数あったが、使用金額が3万以上。そこから、家出や非行につながることを考えられる。私立の学校では携帯電話禁止を設けているところがあるが、実際は機能しているとは考えにくい。ただ、禁止項目を設けるだけでは解決しない問題になっている。

斉藤さん

食事の時も食卓に出してますね（笑）。

まさに、コミュニケーションの問題。今の時代の寂しさから来る問題点ではないか。みんなと遊んだり、おもちゃで遊んだり、それら子どもたちの活動が携帯電話にかわってしまっている。CMの影響や、その機能の豊富さに子どもたちはひかれていく。フィルターが子どもたちにはないのが当然。だから問題である。

吹田さん

すべて私の子どもたちにあてはまります（笑）

私の家では高校生になるまでだめ。でも子どもたちは何とか友人関係はつながっていたようだ。さらには、携帯電話の使い方もいろいろな場面で行ってきた。報告でもあったように、第三者に他人の携帯アドレスを教えたりする場面が実際に出くわしたときには、指導したという経験が私にもある。ただ、これはたまたその現場にいたわけだが、親の知らないところで、把握できないことがほとんどなので、大変難しい問題である。

長井教頭

イギリスのある学校で、携帯で問題を出したり、生徒指導をしたりするという教育実践の報告をみたことがある。いい使い方と悪い使い方があって、いい使い方にも注目したい。本校では、授業中鳴ったら没収、後日返却。それぞれのご家庭で携帯電話の諸事情は様々。私の家庭では、自分の部屋に携帯はもって入らないというルールがある。

斉藤さん

確かに、携帯＝モンスター というイメージがある。いい使い方もある。E-mail を使って、グローバルな活動が簡単にできることのすばらしさがある。

る。そこをもっと広めたい。

芝井さん

やはり、禁止や規制だけではだめで、限界があるのでしょうか。

④ 司会は教頭へ

学校からの発表（Ⅱ） 今年度の学力向上の取り組みの報告（秋元首席）

<特に5期生（現在1年生）の取り組みの成果と今後の展望について>

芝井さん

週末課題と週間課題についてももう少しお聞きしたい。成功の要因は？

秋元首席

まず、教科と学年の連携。教科の指導に担任が踏み込んでいることが最も多き要因。

山本首席

数学科の立場からは、全クラス担当者は違えども、共通の課題（宿題）にしたこと。すなわち、教科教員の連携が強化されたこと。さらに、数学の特徴である、2こぶラクダ化現象の解消。つまり、中間層もしくはその下位層にスポットを当てた取り組みをしたことがあげられる。

芝井さん

定着すると大きな成果につながる内容で、評価できる。生徒全体の目標設定が向上することにつながる。

秋元首席

それは確かに顕著にあらわれていて、例えば国公立大学の志望者は240名中150名で、自主参加の土曜講習の参加率も、4期生までは徐々に落ちていくのが、5期生はそれが見られない。単位未修得者は極めて少なく、2年次以降の選択希望をみても、ほぼ全員が数学をあきらめていないという実態がある。

吹田さん

授業について行けない、分からない生徒に手を入れる対策が、全体に大きく功を奏しているのがわかる。大変いいこと。意欲の向上はやはり大切。ただ、先生方の負担が増えているのでは？

司会（教頭）

土曜講習については、開校当初の読みは「土曜日にまで学校に来て勉強する生徒は、すごくやる気のあるわずかな生徒だけだろう」というのであった。だから講習参加人数は減って当然だと考えていた。しかし、その考えを脱却して、今年度新たな取り組みをすると、このような成果が出た。このままでは、先生方がパンクする。それぞれの先生方のやる気に頼っているのが現状。

芝井さん

生徒間のつながりや集団を使う手はないだろうか？先生方の取り組みだけでは無理である。また、外部を使う手もある。私立ではすでに予備校のサテライトを学校に導入して、実践していると聞く。公立では難しいのかもしれないが、いろいろ追求できるのでは。

松本校長

公立でも行っているところはあります。

山本首席

インターンシップの利用の可能性があると思う。

吉田室長

とにかく、リアルタイムが最も効果的で、質問したいときに質問できる環境づくりが大切だと考える。ただ、これもやはり先生方の忙しさが問題。

芝井さん

関西大学や他の大学でも、先生が必ず準備室に居る時間帯を固定し、学生たちに公開している。有効な活用が可能である。

会議を減らして生徒と向きあう時間を増やすということも、意図的につくらないとなかなか難しい。

斉藤さん

何かやることの大切さ。何かやりながら変えていくことの大切さ。槻の木高校に期待します。